

明治四十三年十一月七日より同十一日に至る、日數五日間、上野出發、高崎、長野、松本、甲府を経て飯田町歸着、行程三百二十哩。

午前六時十分

上野發

午前八時五十八分

高崎着

教育品展覽會、高等女學校參觀。

午後二時十八分

高崎發

午後七時四十九分

長野着

長野市、鴻靜館宿泊。

十一月八日(晴)

長野縣師範學校、中學校、高等女學校、城山小學校參觀。

長野市、鴻靜館宿泊。

十一月九日(曇)

午前六時三十五分

長野發

午前九時十五分

松本着

高等女學校、中學校、松本(開智)小學校參觀。

十一月十日(雨)

女子師範學校、同附屬小學校參觀。

午後三時

松本發

午後九時

甲府着

甲府、米倉旅館宿泊。

十一月十日(曇)

男女師範學校參觀。

午後四時五十五分

甲府發

午後十時四十分

飯田町着

解散。

分擔

(教室係)

中津 安彦君 飯田 文一君

(教具係)

湧口 滿君 佐藤七之助君

(教材係)

中根 孝治君 野口 涉君 山岸 貞一君

(成績品係)

安藤 義茂君 堀 秋成君

(教授の實察)

田中 實君 今井伴次郎君 筑瀬由太郎君

(美感的施設)

岡登 貞治君 山本 四郎君

(スケッチ係)

中島英二郎君 秋山 任君

(日誌係)

吉田 久君

⑤ 平子鐸嶺死去

明治四十四年五月十日、平子鐸嶺(本名尚)が三十五歳の若さで病死し、非常に惜しまれた。鐸嶺は明治十年三重県津市に生まれ、同二十九年本校絵画科(日本画)第二年終了後西洋画科に転入し、同三十四年に卒業した。翌三十五年金港堂に就職。三十六年東京帝室博物館嘱託兼内務省嘱託となり、一時『馬酔木』の編集員ともなった。三十九年哲学館講師就任。四十年内務省古社寺保存計画調査嘱託。四十三年古社寺保存会委員。本校在校中から『仏教』『東京美術学校校友会雑誌』『新仏教』『新仏教』等に論文を寄稿し、卒業後は『馬酔木』『東洋哲学』『新仏教』『国華』『考古会』『太陽』『歴史地理』『建築雑誌』『史学界』『史学雑誌』『史学雑誌』『宗教界』『学燈』『美



平子 鐸嶺

術新報』『絵画叢誌』『聖徳』『日本及日本人』『六
大新報』及び新聞等に仏
教美術に関する論文や論
説を執筆。特に法隆寺再
建非再建論争の折りに非
再建論の先頭に立ち、喜
田貞吉と論争を繰り広げ
たことは有名で、本校卒業生のなかでは大村西崖、関保之助、戸部
隆吉らと同様に学問的な業績をあげて異彩を放った。

五月十四日、築地本願寺別院で追悼会が行われ、中川忠順、今泉
雄作、正木直彦、黒板勝美、ラングドン・ウォーナーをはじめ百五
十名が参会した。その後間もなく友人たちが『柏のおち葉』を刊
行。墓は郷里津市の浄安寺に建てられた。四十四年十月には法隆寺
山内に鐸嶺供養の石製五輪塔が建立され、十月十六日に挙行された
その供養式には黒板勝美、大槻文彦、岡倉寛三、カーチス(ボストン
博物館日本部長)その他の有識者が参会したが、このとき演壇に立っ
た岡倉は法隆寺の研究と保護を目的とする法隆寺会の結成を提唱
し、自ら尽力する意志のあることを示し、それが一つの発端となっ
て、のちに正木直彦、黒板勝美らの尽力により法隆寺の一大支援団
体である聖徳太子奉讃会が設立された(大正十年)。なお、大正三年
には鐸嶺の論文三十四篇と友人たちの文を収録した『仏教芸術の研
究』が友人たちの手で刊行され、昭和四十九年には野田允太著『鐸
嶺平子尚先生著作年表・略歴』が刊行されており、これらによって

研究に燃え尽きた生涯を一望することができる。

⑥ 上宮太子祭と記念展覧会

明治四十四年六月十一日、本校の新築大講堂で国華倶楽部主催の
上宮太子祭が催され、当日と翌日の二日間、本校主催の太子祭記念
展覧会が開催された。『東京美術学校校友会月報』第九巻第十号は
「上宮太子祭及記念展覧会号」として発行されており、次に掲げる
発行主旨のなかに行事の目的も記されている。

上宮太子祭の濫觴

日出國千三百有餘年の昔、推古天皇の御宇、凡百の制度を定めら
れ、文化を促進せられ、藝術を發展せしめられたるは、厩戸豊聰
耳皇子と稱へ奉りし、上宮聖徳太子の賜なりとす。故に藝術家に
在りては、太子は實に斯道の先達として、將た恩師として、一日
も忘るべきにあらざるなり。我東京の美術家團體たる國華倶楽部
は茲に見る所あり。客歲阿佐太子の筆と傳ふる太子の御影寫を本
尊として、四月十一日を卜し、忍が岡の韻松亭にて其祭祀を舉行
したりしが、今茲明治四十四年六月十一日には、祭場を東京美術
學校の新築大講堂と定め、同校教授帝室技藝員高村光雲翁の謹刻
に成りたる太子の御像を本尊として、因縁最も深き大和國の法隆
寺管主を招きて開眼の式を行ひ、酒饌を具へ、舞樂を奏して、盛
なる祭祀をなし、別に東京美術學校に於ては、之れを機として、
太子に關係ある當代の遺品等を展覧せり。今茲に太子祭及展覧會
に關する事柄を蒐録するは、啻に此盛典を紀念せんとするのみに
あらず、亦太子の恩徳の深く高きを傳へんと欲する微衷に外なら